

金澤古蹟志卷廿五

城西三社臺

○長土塀通

従前は今枝・村井・長の家中とて、三家の下邸なる外圍の土塀、往來の左右に引繼ぎて、家屋・門戸等もなく、土塀のみなりし故に、世人長土塀と俗稱す。然るに廢藩の後下邸を廢し、追々商家を建築し、今は長土塀の遺名ある而已となりしかど、戸籍編成の際長土塀一番丁・二番丁と稱し、町名となしたり。

○今枝氏下邸跡

右下邸は、舊藩中は今枝家中と稱し、今枝氏の家人の邸地なり。廢藩後下邸の名稱を廢し、長土塀一番丁とす。

○今枝氏別墅

此の別墅は即ち下邸にあり。今枝氏家譜に、寛文十年庚戌九月十三日。廢本宅於直方、構居於別墅。と有りて、民部

近畿の時此の別墅を造り、爰に初めて居住せられたり。近畿の虚直亭記に云ふ。庚戌之秋。構茅屋於別墅。及將移居。偶得文公石刻虚直二大字。揭之文房。周子曰。無欲則靜。虚動直。夫欲仁之流弊。而人之所不能無。雖大賢君子。不時々拂拭。則猶鍍鎔之易生。不去身膏膏也。目無欲而視始正。耳無欲而聽始順。口無欲而味始和。凡百行千慮爲欲所礙。不得自由。故往哲教訓。萬卷議論。總不過使無欲耳矣。希聖希天之學。豈不亦直捷易簡乎。置之他求。不可謂道。予遁世網。三年于茲。雖間繕書卷。而專對額字。而靜坐澄心。若粗有見焉。亦恨不能實踐斯躬。復終想像而已。非知之艱。行之惟難。可嘆哉。寛文十二年冬念有五夜挑寒燈。讀凍硯記書窓下。又鳩巢文集に、今枝家貫珠軒記を載せたり。其の記に云ふ。疊々低於畫檐。疑曉星之將落。輝々照乎朱檻。映朝暎之方臨。瓊瑤繆其在目。鳴委佩於波阜。珊瑚燦其奪目。仰綬旒於魏廷。春華遇雨。而有零落之憂。秋葉經霜。而有凋傷之憂。豈若斯樹之靈不落不凋。擅奇九月。騰異三秋。風雨之夕。霜露之晨。可以勸賓客之杯。可以誘詩賦之興。然後知庶子之春華不如家丞之秋實也。と。